

# 第一回「漢詩における旅」

二〇一一年四月十六日（土） 中国文学・静永 健

\*\*\*\*\*

①

送沈子福帰江東

王維（盛唐 七〇一？～七六一）

沈子福の江東に帰るを送る

楊柳渡頭行客稀  
楊柳の渡頭 行客稀に  
詈師盪槳向臨圻  
詈師 槳を盪かして 臨圻に向かふ  
唯有相思似春色  
唯だ有り 相思の春色に似て  
江南江北送君帰  
江南江北 君が帰るを送る

柳しだれる渡し場に、君はひとり小舟の中。船頭は、ゆらりゆらりと艚を漕いで、向こう岸まで進み行く。でも春景色だけは正直に、江の兩岸に花びら散らせ、君の旅路をどこまでも見送る。

②

遊山西村

陸游（南宋 一一二五～一二〇九）

山西の村に遊びて

莫笑農家臘酒渾  
笑ふなかれ 農家の臘酒 渾れるを  
豊年留客足鷄豚  
豊年 客を留めて 鷄豚 足れり  
山重水複疑無路  
山重なり水複りて 路無きかと疑ふに  
柳暗花明又一村  
柳暗く花明らかなるところ 又一村  
簫鼓追隨春社近  
簫鼓 追隨して 春社 近く  
衣冠簡朴古風存  
衣冠 簡朴にして 古風 存す  
從今若許閑乘月  
今より もし閑に月に乗ずるを許さば  
拄杖無時夜叩門  
杖を拄き 時無くして 夜 門を叩かん

農家仕込みの濁酒だが、豊年満作でご馳走はたんまり…… そんな村里を訪ねて、西の山を越えて歩いた。幾重も山を通り越し、複雑に合流する川をさかのぼって、もうこの先に人家は無いかと思つた途端、柳の若葉の向こうにパツと春の花が咲き誇り、また一つの小さな集落に辿り着いた。

今日は春祭り——。笛や太鼓も面白く、装束はいかにも時代を感じさせる古めかしさ、いや、実になつかしい。月明かりの夜、また暇が取れたら、杖をつき、真夜中であっても、この村の門を叩こう。

③

桃花源記

陶淵明（六朝晋末〜宋 三六五〜四二七）

晋太元中、武陵人、捕魚為業。  
緣溪行、忘路之遠近。  
忽逢桃花林。

夾岸數百步、中無雜樹、  
芳草鮮美、落英繽紛。

漁人甚異之、

復前行、欲窮其林。

林尽水源、便得一山。

山有小口、髣髴若有光。

便捨船、從口入。

初極狹、纔通人。

復行數十步、豁然開朗。

土地平曠、屋舍儼然。

有良田美池桑竹之屬。

阡陌交通、雞犬相聞。

其中往來種作男女衣著、悉如外人。

黃髮垂髻、並怡然自樂。

見漁人、乃大驚。

問所從來。具答之。

便要還家、設酒殺雞作食。

村中聞有此人、咸來問訊。

自云「先世避秦時亂、率妻子邑人、

來此絕境、不復出焉。

遂與外人間隔。」

問「今是何世。」

乃不知有漢、無論魏晉。

此人一一為具言所聞。皆歎惋。

餘人各復延至其家、

皆出酒食、停數日辞去。

此中人語云「不足為外人道也。」

既出。

得其船、便扶向路、處處誌之。

及郡下、詣太守說如此。

太守即遣人隨其往、

尋向所誌、遂迷不復得路。

晋の太元中、武陵の人、魚を捕ふるを業と為す。  
溪に縁つて行き、路の遠近を忘る。  
忽ち桃花の林に逢ふ。

岸を夾むこと數百步、中に雜樹無く、  
芳草鮮美にして、落英繽紛たり。

漁人 甚だ之れを異とし、

復た前み行き、其の林を窮めんと欲す。

林は水源に尽き、便ち一山を得たり。

山に小口あり、髣髴として光有るがごとし。

便ち船を捨て、口より入る。

初め極めて狭く、纔かに人を通すのみ。

復た行くこと數十步、豁然として開朗なり。

土地は平曠にして、屋舎は儼然たり。

良田 美池 桑竹の属あり。

阡陌は交り通じ、雞犬 相ひ聞こゆ。

其の中に往來種作せる男女の衣著、悉く外人の如し。

黃髮 垂髻、並びに怡然として自ら樂しめり。

漁人を見て、乃ち大いに驚く。

従つて來たる所を問ふ。具さに之れに答ふ。

便ち要へて家に還り、酒を設け鶏を殺して食を作る。

村中 此の人あるを聞き、咸來たりて問訊す。

自ら云く「先世 秦時の亂を避け、妻子邑人を率ゐ、

此の絶境に來たり、復た出でず。

遂に外人と間隔せり。」と。

問ふ「今は是れ何の世ぞ。」と。

乃ち有漢を知らず、魏晉に論なし。

此の人 一一為に具さに聞く所を言ふ。皆歎惋す。

餘人も各の復た延きて其の家に至らしめ、

皆 酒食を出だし、停まること數日にして辞去す。

此の中の人語つて云く「外人の為に道ふに足らざる也。」

既に出づ。

其の船を得て、便ち向の路に扶ひ、處處に之れを誌す。

郡下に及び、太守に詣りて説くこと此くの如し。

太守 即ち人を遣はし其の往くに隨ひ、

向に誌せし所を尋ぬるも、遂に迷ひて復た路を得ず。

南陽劉子驥、高尚士也。

聞之、欣然規往、

未果、尋病終。

後遂無問津者。

南陽の劉子驥は、高尚の士なり。

之れを聞き、欣然として往くを規ふも、

未だ果たせず、尋いで病みて終はりぬ。

後、遂に津を問ふ者無し。

④

山中問答

李白（盛唐 七〇一〜七六一）

山中の問答

問余何意棲碧山

余に問ふ 何の意ぞ碧山に棲む

笑而不答心自閑

笑って答へず 心おのづから閑なり

桃花流水窅然去

桃花流水 窅然として去る

別有天地非人間

別に天地の人間に非ざる有り

もしもし、貴方は何故こんな奥深い山に住んでいるのですか？

ふふん、私のこののんびりとした心の安らぎは、お前にはわかるまい。

ほら、谷川の上流から桃の花びらがゆったりと流れてくるじゃないか、

この先には、お前さんたち俗世間とは全く違う別世界があるのだよ。

旅……空間を越える「たび」

時間を超える「たび」

身体を移動させる「たび」

心を遊ばせる「たび」